▼編集後記

ルな事態を経てミクロな世界がどのように変化するのでしょうか。 陽の光を強く求めるドイツの人たちにどの程度定着するのか、すこし興味があります。グローバ は、欧米でもマスクをする習慣が定着しています。流行が終息したあと、この日常の所作が、太 スクをするのは病状がひどいときか、正体を隠すためと思われていたふしがあります。現時点で 思っていたようです。この感覚、新型コロナウイルス流行前まで、欧米人に根強くみられ、マ ることに何度が言及しています。マスクをする習慣を「迷信」とも表現しており、効果がないと してきた建築家ブルーノ・タウトは、『日記』で日本の人が風邪の予防のためにマスクをしてい フター・コロナ」の世界で気になっていることにふれます。ナチス政権誕生に伴って日本に亡命 現状、先行き不安ですが、不安で怯えていてもかえってしんどいので、 あるかもしれない

ためです。会員の皆さんの積極的な投稿をお待ちしております。(北村昌史 次号から原稿の種類に「研究動向」が追加されました。海外や日本の研究動向を広く共有する

に思えるような日々がいずれ来ることを願ってやみません。/文末ではありますが、玉稿を投稿 法や生活スタイルが、それまでの生活をより逞しく豊かなものにすることになった――そのよう 平準化したという点で、重要な進展であり変化でした。その一方で、授業負担や管理業務が増加 ようになったこと、そして、遠隔地の同業者との定期的な勉強会を低コストで実施できるように ます。/オンライン学会・勉強会の普及により、従来なら参加できなかった催しに参加できる 例年通り いただくとともに、校正にご協力いただきました執筆者の方々に御礼を申し上げます。 なったこと、これらは、限られた時間を最大化し、地域や立場、経済状況による格差を幾ばくか ん。政治、 コロナ禍が始まってから実に一年あまりが経ちましたが、今なお事態に収束の兆しは見えませ 研究に割ける時間はトータルでは減ったように感じます。/この一年強で獲得した新たな手 経済、社会、日々の暮らしの基盤が、徐々に削り取られ、弱体化するなかにあって、 ─若干の遅れはありながらも──無事今号を発行できたことを、とても喜ばしく思い T . S

▼編集委員

北村昌史(大阪市立大学)

服部伸(同志社大学)

田野大輔(甲南大学)

中野智世(成城大学)

西田慎(奈良教育大学)近藤正基(京都大学)

▼編集実務

鈴木健雄 (京都大学)

ゲシヒテ

第 14 号

2021年4月30日発行

▼編集発行

ドイツ現代史研究会(代表・大津留厚

T602-8580

同志社大学文学部 服部伸研究室内京都市上京区今出川通烏丸東入

▼印刷

株式会社オーエム